

夏の路

水野 仙子

平らかに、時々は廣く追く、紆曲つては叢のかげに隠れて、またから／＼と白く現はれる村の路に、牛乳屋の車が新らしく轍の跡を薄くつけて行つた。白い脚絆に白い腰巻を下げて、浴衣に締めた黒襦子の帯に、端折つた裾を挟んで、袋を袈裟がけにした肥つた老女が、同じやうな装束をした二人の男の連れと並んで、手拭ひで汗を拭きながら擦れ違つて行つた。札所廻りの人達であらう。

そよ／＼と無暖い風が吹くと、右手の左手の、南瓜畑に丸い葉が揺めいて、一樣に葉の裏の白いのを見せる。黄色い花の間々の下には、まだ花の名残りをとどめた青い不格好な實が、覗いてるのもあれば、隠れて居るものもある。

刈られて野に伏した麥の畝の間には、紫の莖の色濃い茄子や、畑によつては小豆と思はれる葉の形の、柔かさうなのがふら／＼して居る。胡瓜の手に蔓も背高くのびて、白い粉を着た細やかなのが、葉隠れのところ／＼に下つてるのが見える。馬鈴薯畑、大根畑、隅には坊主になつた葱などが寄せられてある。脛深く泥につかつて、水田を搔いて居る人の影が青葉とともに

揺れた。

樹陰を々と選つてつい草の繁つた道に外れると、薊や草苺の色がまづ目を引く。黒い程緑の濃い杉の低い森、すく／＼とした其足間から新らしい家の腰が見えて、柵の中には白と黒の斑や茶の斑の牝牛が、寝たり起きたりして、懶ささうに體を扱かつてるのが見える。

檜の林の小路を潜れば、足音に驚いて枝から枝にところを變へた小鳥の羽音に、不意のこととて此方も少からず驚かされて、心持ち濕つた草深い路に日かげが折々さして、風吹けば音なく揺れる草に音があり、落葉を踏む響とも違ふ一種のそよめきは、青葉の下の細い徑をわけてはじめてそれを知ることが出来る。

徑を出外れて萱の繁みに隠れることしばし、竹藪の涼しい中に路は續いた。根元に皮の袴を抜いた今年竹が、芽え／＼として發育の色を見せて背丈を競つて居る。間もなく藁屋根の一つ二つが、歩くにつれて青葉を捲くるやうに現はれて來た。低い軒の前には、緋のやうな石榴の花と、毬のやうに咲いた紫陽花の花の下に、一家の人達はそれ／＼な仕事にうつむいて居る。まだ生々しい土の馬鈴薯が、薄紅い色を覗かして山のやうに積まれてあつた。いづれも足音に顔を振りあげ

て私を見る。こゝこゝと何かを喙^{つば}んで居た鷄^{にはとり}の一族が汗を拭く半巾^{ハンケチ}のひらめきに怖れて、玉椿^{たまつばき}の垣^{かき}の根元を潜^{くぐ}つて去つた。櫨^{かし}の樹^{しん}を心にして積みあげた藁^{わら}にふの下には、去年^{こぞ}の落葉^{らくえつ}が朽ちもせずに喰^はみ出て居る。いつかまた稍々^{やや}廣^{ひろ}やかな村の路に合^あつて、當^あて途^ともなく歩いて行くと、路の曲り角に一二軒の家が見える。「はい四十三錢五厘！」と突然聲^{おこ}が起つて、汚^{みなり}い服裝をした女が店先に立つた。古煤^{ふるすす}けた家には燐寸^{マチ}やら煙草^{たばこ}やら駄菓子などが並べられてある。和洋御菓子^{おんくわし}と箱車^{おろ}に書いた卸し屋が、

「へえ有難う」と言つて箱の戸をびたんと音たてて閉めた。

「四十三錢五厘、あるでせう、よく數へておくんなさい」

私の後^{あと}には錢の音が高く残つた。

軽い欠伸^{あくび}が口を衝いて出ようとしたので、私は初めて足の疲れを知つた。歸らうとするでもなく、また何處かへ出ようといふ目的^{めあて}もなく、たゞ道の續くがまゝ曲るがまゝに委^{まか}せて歩いて居る。かうして今日も午後

の散歩の日課を踏んだ。

ふと朽ちた山門を控えた藁葺^{わらぶき}のお堂の前に出た。桑の葉の繁つた垣を分けて、横から境内^{けいだい}にはいつて見ると、松や櫻^{さくら}や樅^{もみ}などの樹蔭^{こかげ}に、箒^{はき}の跡が涼しげに行き届いて居る。

不動明王と金文字の出た正面の額^{がく}を見あげて、試^{こころみ}に鰐口^{わにぐち}の綱^{つな}をとつて一波打たせると、鈍い籠^{かご}つた音が思ひの外^{ほか}低く響いて、途端に白い鳩が一羽お堂^{だう}の中に翼の音をたてた。

下駄の音が堂の床に高かつたので、心して寄つて暗い格子の中を覗いて見ると、炎の中に劍^{つるぎ}を手にして立つた不動明王の御像を正面にして、赤地の幕には定紋打ち太鼓やら提灯^{ちやうちん}やら、眞鍮^{しんそう}の燈蓋^{とうがい}などが飾りたてられてある、暗いなかに光つて居る御鏡^{おかがみ}には青葉の影がうつつて居た。

一通り奉納の額を見廻して、まづ目に据^さつたものを調べると、牡丹に唐獅子の大きなのは、天明二壬寅^{みずのえとら}年七月吉祥日と書かれてある。加藤清正が虎退治の繪の幼なげなのもあれば、日露戰役に出征^{しゆつせい}した村人の名がづらりと書かつて額^{がく}になつて居るものもある。大關^{おほぜき}とある菰^{こも}包^づみの酒樽^{さけづ}を書いて、その前に大きな和錠^{わぢやう}を書き、明王^{みやうわう}の前に手を合せて居る男を書いたのなぞは、禁酒^{けいしゆ}の願^{ねがひ}の積りであらうと微笑^{ほゝゑ}まれ、明和五年戊子^{つちのえね}七月吉日、願主^{ぐわんしゆ}市村座留場市右衛門とやう／＼判じ讀まれる古びた額には、白拍子^{しらびやし}と殿様風な立つた男と、碁盤^{ごばん}に腕を掛けた奴風^{やつふう}な男が書いてあつて、顔を染めた胡粉^{ごふん}ばかりが白く繪の名残りをとゞめて居る。

そのうちに珍らしいのが一つあつた。額の大きさは一間^{いっけん}もあらうと思はれる程で、馬具を置いた栗毛^{くりげ}の馬

が、何かに驚いて白い眼を剥き出して躍り狂つて居る足の下に、商人風に髪を束ねた旅装束の男が踏み倒されて居る。笠を着たり挟み箱を擔いだ男が三人驚いた形装をして居る中に、手綱を持つた馬子の驚き顔は至極おどけて居る。猶よく／＼見ると、馬子の後に袖無しを着た童が、奴風を持つたまゝ逃げて行かうとして居る。すると今度は畫面の右に持つて來て、石垣を書き竹の矢來を書き松の樹を描き、馬の脚の下に男と同じ着物を着た男が、床をのべて寝て居る枕許に藥の袋と茶碗が一つお盆に乗つて居るのは、病床のこを意味してゐるのであらう。取り廻した二枚屏風のかげからは、淺黄の風呂敷包みが覗いて居る。遙かに上の方に當つては、二人の童子を連れた不動王の尊體が雲に乗つてあらはれて居る。左の隅にはお宮があつて、突き袖をした内儀が、縞の羽織を着た夫と子供の一行に、供の者を連れて鳥居を潜らうとしてゐるところがある。全面に渡つて一面に金箔を散らしてゐるので、群青色や朱や胡粉などの、けば／＼しい色と相俟つてなか／＼華やかである。

繪もかう具體的に書かれては、はゝあと其の意味が呑み込めて、ひとりで興を催して居ると、猶其額の傍に御家流の字で由緒書きがしてゐるのに目がついた。書かれた板が古びて居るところへ、ところ／＼汚點も出來て居るので、いくら目を睜いても／＼續けて讀

み得ることが出來ない。嘉永四年正月本多様お成……と讀んであとはわからず、私儀廿五歳の春家業修行の爲とやう／＼判じてまた躓く。子供風揚げ居たるが、ふと右の風絲馬の首にかゝり、右馬驚きて……氣絶えたり。やふ／＼氣が付き候へども足骨くぢきて痛み強き故、道遙かなる醫師たのみ、且早々歸府いたし、種々養生いたし候へども抄々しくもなく難儀……。

首が痛くなつた。涙が溢れさうになつた眼を押へて猶讀み取らうと苦心する。

ある夜兩親夢のうちいづくともなく病人怪我はもとの身になほす……といふものあり、ゆめさめほつと思ひかゝるも兼ねてねんずる不動尊のおつげとお寺參詣して……大丈夫なり行家事向諸御大名様御出入は勿論萬事盛運となる事まつたく當不動尊のお影、利益益々廣大御禮のため右少額を奉致敬 白もの也、安政四丁巳稔春王正月元旦。

骨を折つてかう讀み取つて、熱く痛くなつた目をしてばたゝいて、も一度額面をぶらりと見渡した。いかにしても長らく上ばかり見つめて居たので首が痛い。

ぶらりと其處を出て境内を横切らうとすると、松樹の根元によせかけた圓みがゝつた石に、誰の句か彫んであるのが目についたので、今度は其前に跼んでためつすがめつして見る。はせをとしてある。

昏^{くれ}おそき山^{さん}谷^や過^こぎけり紙草履^{しそり}。

夕日にいつか樹^この間を洩れて居た。葉といふ葉をそよめかす風は、夕べとなつて殊に武蔵野の野の面^もにさゞめき渡つた。

【入力者注】 底本の目次には「夏の野路」と記載

されています。

原文は総ルビですが、一部のみ残しました。

底本…「女子文壇」明治四十三(1910)年第十號

テキスト入力…小林 徹

公開…令和三年三月三十日

改訂…令和五年二月二日

リンク…[水野仙子ホームページ](#)